

東京四極だより

【書: 篠田直雄 東京四極会初代理事長・昭和3年卒 高商4回】

<http://www.tokyoshiwasukai.jp/>

之生会 野川隆 姫野易 奥川隆 野川隆
責任者 東京四極会
責任者所 東京四極会
発行所 東京四極会
編集者 東京四極会
発行所 東京四極会
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町3-45-3
浜町野島ビル5F 浦崎税理士事務所内
TEL/FAX: 03-5641-1542

平成二十四年 東京四極会 新年会開催!

2月4日(土)、恒例の東京四極会新年会を新日鐵代々木俱樂部で開催した。司会担当は野村副理事長(第52回)。新年会は高橋副理事長(第44回)の開会の辞でスタートし、まず姫野理事長(第44回)が挨拶に立った。



姫野理事長挨拶

「例年以上の寒さが続いている。日陰では雪が融けず、関東地域のゴルフ場では来場者が落ちてくる。敦賀湾から琵琶湖、関ヶ原を通じて日本海の厳しい冬風が太平洋側にも渡ってくる。国政に目を転じると仲々自主決定ができず物事すべてが先送りになっている感がある。日本は成熟社会の中で解決策を見いだせない方向に向かっている。こういう中で、わ



相良会長挨拶

「高商、経専、大学10代の諸先輩の母校に対する熱い思いを次世代の若い後輩に伝えていくのが同窓会の務め。6月30日の記念式典で同窓の絆を再確認いただきたい。現在、母校支援の意味も込めて総額5千万円の記念募金をお願いしているが、達成率は55%とずいぶん苦勞をしている。若手会員の皆さんの応募率の向

が経済学部は、大正、昭和、平成へと連続と歴史を積み上げて、今年創立90周年を迎える。お時間あれば6月30日(土)に大分で行われる記念式典にお出かけいただきたい」



下田経済学部長挨拶

「学生の関東地域での就職については、大分という時間距離のハンディもある中でインターシップをお願いしてきた。その成果として今春、在京企業に1名入社が決まった。近年、学生の大学に対する思いと学生同士の絆の希薄化への対応が課題だが、日本の社会を支えていくという本学の理念を伝えながら引き続き指導をしていきたい」

その後、司会者が年長出席者として、池辺和郎さん(24年卒)、荻原智子さん(26年卒)、荒木襄(第30回)、寺田洋太郎(同)、渡邊俊彦(第31回)、後藤浩(第33回)、瀧光太郎(同)、一万田道敏(第38回)、



新年会は、校歌・寮歌

斉唱を佐藤事務局長がいつも通り軽快にリードし、下村事務局次長の中締め挨拶で賑やかなうちに閉会した。

その後、姫野理事長と梅谷寛雄・歩こう会幹事(第38回)から、今後の東京四極会活動予定(下段)を披露した。梅谷さんは「歩こう会は、今年5回の行事を予定している。どしどしご参加を」と挨拶。このところ事実上、休会状態になっていた囲碁将棋活動で、姫野理事長が幹事役を会場で募ったところ、松岡幸秀さん(第52回)がその任を快く引き受けていただいた。

新年会を終えて

田尻 清司(第59回)
今年、我が校の90周年という大きな節目の年であり、高商・経専・大分と受け継がれた歴史を振り返る良い機会のある。私が在籍した1982年(昭和57年)の6月には、開校60周年記念の提灯行列が企画・実行され、我々は在校生として参加した思い出が甦る。夕刻に開校の地・上野が丘に集結して、ゼミの法被を纏い、「開校60周年」と記された赤い提灯を持ち、トキハ大通りに向けて、「校歌」「寮歌」「開校記念歌」「追遥歌」を声高らかに合唱しながら、マントに帽子姿の高商・経専の大先輩

小倉省吾(同)、小野一六(同)、高田正晴(同)、有松英俊(第39回)、小迫邦彦(同)、大山博康(第40回)、財津昌宏(同)、守谷一誠(同)、永野基昭(第41回)、野田和文(同)、松浦靖弘(同)、加志田智久(第42回)、栗林保幸(第44回)、高橋信行(同)、田川敏夫(同)、姫野易之(同)、溝辺憲治(同)、佐藤勝峰(第45回)、内山茂(第46回)、浦崎貞治(同)、原嶋信義(同)、的場正道(同)、下村(卒業順敬称略)
昇(第49回)、奥川隆生(第50回)、小橋薫(同)、河原文博(第51回)、野村聡(第52回)、松岡幸秀(同)、小俣秀記(第54回)、米井晃彦(同)、大坪孝幸(第55回)、梅木俊宏(第58回)、上村憲吾(第59回)、田尻清司(同)、小林伸彦(第60回)、瀨口真一郎(同)、内田孝一(第61回)、大石和也(同)、濱田光徳(同)、松木正典(同)、高橋哲夫(第63回)、櫻井周一(第63回)。

今後の予定


- ◆平成24年理事会・総会 6月2日(土)
- ◆たまには歩こう会 3月3日(土)
- 桐生の街散策 4月8日(日)
- 庭園散歩 5月13日(日)
- 西上州 笠丸山 ハイキング
- 7月中旬 木曾御獄山(予定)
- 11月中旬 紅葉を訪ねる(予定)
- ◆春の懇親ゴルフ 4月9日(月)
- 御殿場 富士カントリークラブ
- ◆若手会員の集い 8月6日(月)
- 二エートキーヨー第一田町ビル店

問い合わせは、E-mail: info@tokyoshiwasukai.jp または、Fax: 03-5641-1542



新年会スナッフ

皆さん、和気あいあいと
楽しいひとときを過ごしました。




「最近、従業員が会社を辞めなくなった」という話をいくつかの会社で聞いたのが、この本を書ききっかけでした。同じ会社に長く勤めるのは良いことだと思いますが、再就職が難しくなっている面もあるのかもしれない。会社を辞めないでいいようにするためには、会社にしがみつくとはいえなく、会社に欠かせない人材として、会社から「辞めないでくれ」というようになるのが一番です。

会社の社長さんが考えていることは、少しでも会社を良くすることだと思います。良い会社として行うべきこととしては、社会に貢献する、従業員を大切にするなど多くありますが、少なくとも利益の上がる(儲かる)会社でないと、会社として存続することができません。会社から「辞めないでくれ」といわれる人

材になるためには、厳しい環境にある会社を儲かる会社にする(儲かっている会社は、より儲かるようにする)ために管理会計の手法が役立つのではないかと考えました。

私は有限責任監査法人トーマツを2011年9月で早期退職しましたが、在籍していたときは公認会計士として多くの会社に監査でうかがっていました。監査は会社の決算書が適切に作成されていることを証明する業務ですが、監査を効率的に行うために会社の内部統制の整備状況を教えてもらいます。多くの会社の内部統制は、不正を防止するため、効率的に業務を行うために構築されています。そしてこの会社でも共通して行っていることが多くあります。

そこで、本書ではこうした例をできるだけ具体的に紹介してみました。管理会計というと難しく思うかもしれませんが、簡単なものも多々ありますので、電卓レベルの計算でできる例を集めています。

中央経済社の担当者からは、「とにかくやさしく、読みやすく」といわれていましたので、見開きの2ページで一項目とし、恥ずかしいくらいやさしく書いてみました。書店でご覧になってい



著書の紹介 松岡幸秀(第52回)

七つ釜五段の滝と エメラルドの流れ

——新緑と石楠花の西沢渓谷——
(第50回歩こう会)

新宿を早朝7時40分に出発するクラブツーリズムのバスはほぼ満杯であったが、我が歩こう会メンバーは今回都合のつかない人が多くて参加者は僅か5人とやや寂しい例会となった。

行きはおおむね順調に流れ、深谷入り口の駐車場に十時半に到着した。

ここから林道を歩いて西沢山荘(登山道の入り口)に向かう。20分程、ねどりの橋に着く。

その先、行く手には甲武信岳の山塊 鶏冠山・木賊山・破風山などが聳えている。快晴の空をバックに濃い緑の山容が眼に鮮やかである。10分程で西沢山荘に着いた。ここから車道と別れ、

間もなく二俣吊り橋に到着するクラブツーリズムのバスを慎重に見ながら進んで行くとしばらくして最初の滝である大久保の滝が眼に飛び込んでくる。滝壺の水は透明感のあるエメラルド色で勢いよく渦を巻いている。そこを過ぎると直ぐに三重の滝である。

ここからは川岸の岩の上の道である。途中、ふぐ岩や人面洞などの表示のある所を過ぎ、急坂を登ったり降りたりを繰り返す。鎖につかまるようなところもある。左側はずっとコバルトブルーの急流と新緑のコントラストが織りなす渓谷美で、ときどき足元に三つ葉つじや山桜の散り残りの花弁がこぼれていた。

龍神の滝の辺りの河原で昼食タイムをとった。昼食休憩のあと、もうひと頑張りとしてさらに上を目指す。細く小さくて見逃しそうな恋糸の滝や大きな音をたてて激しく流れ落ちる貞泉の滝を眺め、母胎淵やカエル岩などを望みながらひたすら渓流を登りつめて行く。

やがて、方丈橋に着く。この先に本日の目玉である(七つ釜五段の滝)が眼下に現れる。釜から釜へ白い飛沫を上げて流れ落ちる爆水と藍色の淵の淀みは、じつに壯観である。上三段と下二段に分かれ、一度に全容は見えないがビューポイントではカメラを構えた人々で混雑していた。こちらでもデジカメでパチリ!

絶景を堪能して先へ進み、前方に本日最後の滝不動の滝を拝んだ後は左手の急な木製の階段を登るとそこは西沢渓谷の最高地点(標高1400m)だ。

下りの道は旧森林軌道の廃道をたどる。良く整備されて歩きやすいのだが道すがらところどころにまだレールが残っていたり、腐った木製の橋

が下の方に見えたりしていた。過去には運転を誤ってトロッコごと谷底に転落した事故もあったという。左手には切れ込んだ溪谷がのぞいており、鮮やかな緑が眼にしみる。あちこちに丈高い石楠花の花を見る。30分ほど下ったあたりに大展望台がある。正面に甲武信岳山塊の山々が展開して、はるか下に溪谷を望み、石楠花の花が咲いて素晴らしい景観だ。

この後二か所の展望台や山の神を祀った祠など

日本百名山の名峰・蓼科山(別名諏訪富士)に挑む

一泊二日の登山

(たまには歩こう会第51回例会)

8月29日の午前10時半、新宿駅西口(新宿セントアールビル前)から直通・高速バス(ハーヴェスト・ツアー)に一行七名が乗り込んでの出発。バスには山仕度の人もちらほら乗っていたが、大部分は一般観光客でほぼ満杯の状況。午後3時に「蓼科牧場・ゴンドラリフト」に到着。バス停近くの民



間もなく淵れ沢に突き当たると、崩落止めの丸太を斜めに繋げており、砂も姿を見ることが出来なかった。記念写真を撮り、「頂上ヒュッテ」に戻って昼食。

11時半に下山に懸かったが、降りるよりさらに危険度が増すので、慎重の上にも慎重に降りる。將軍平で小休止後往路を戻る。誰かが「行きはよいよい、帰りは怖いだね」といったが、滑りやすい急坂が厳しく感じられる。馬返しまでは急な坂道で、そのうえ細かい砂利道なので滑り易く、歩幅を小さくして下る。

7名

ここには東屋風の避難小屋があり、雨宿り兼昼食。麓岩はすっぱりと切れ落ちた断崖絶壁で方位表示板があり、前方には妙義山から浅間山さらに北アルプス(白馬・槍が岳)が遠望できるそうだが、この日は雨とガスのため視界が悪く残念。

昼食後に経塚山を目指して出発。広葉樹と笹原の平坦な林の中の道を歩く。天気の良い日にはさぞ快適であろうと思われた。経塚山と荒船不動との分岐の手前左手には神々の争いの縁起を記した石碑や右の祠が見られた。

30分程で分岐に着いた。急坂で滑り易い坂道を登り、最高点(1,422m)へ。頂上は狭く眺望も良くないが、二等三角点があり、石祠が祀られていた。取りあえず証拠の三人記念写真を撮り分岐に戻った。

分岐からは丸太の長い急な階段を下り、午後3時頃大きな案内板のある星尾峠に到着。この後、比較的に広くて歩きやすい山道を下っていくと、周りの木々がカラマツ林に変わってきた。沢沿いの道とどこどこに真っ

「さんげ坂」との別名があるという。少し行ってもった御馳走であった。出発して約2時間、ようやく將軍平に到着。こは「大河原峠」と「天祥時原」からの道との合流点で、やや開けており、山小屋「蓼科山荘」がある。あたりにアキノキリンソウやハクサンフウロが可憐な花をつけていた。10分程休憩した後に、最後の急登に懸かる。歩きだしてすぐに大石ゴロゴロの悪路となった。足元を確かめながら一歩一歩登って行く。鎖場もあり、両手両足でよじ登るような難所もあったが間もなく「山頂ヒュッテ」に到着、ここに荷物置いて頂上へ。

山頂一帯は溶岩石でう

赤沼平の湿原をせき止めた人造湖で標高1,530mにあり、周囲には1.8kmの遊歩道がつけられ、入り口近くに湿原があり、数十種類の湿性植物や高原植物が季節ごとに可憐な花をさかせている。さすがに高原地帯だけあって涼しく、早や、秋の佇まいが感じられた。

宿に戻って24時間かけ流しの温泉で汗を流し、食堂での夕食はニツマス

西上州の奇峰「荒船山」に挑む

(第52回歩こう会)



昨年11月6日の午前7時50分にクラブツーリズムのバスで新宿を出発、登山口の内山駐車場(1,080m)に到着したの



が、振り仰ぐ荒船山はガクが掛って折角の紅葉がくすんで見えた。整備された平坦な道を歩き、登り返した所に「内山峠0.6km、荒船山頂2.7km」の看板があった。ここからは右側が落ち込んで細い道をつけた

赤な美をつけた武蔵あぶみを見かけた。

概ね快調に飛ばし40分程で荒船出世不動尊(1、040m)に到着。境内には赤や黄色の紅葉葉が敷き詰められていた。

ここでトイレ休憩の後、車道を内山大橋に向かう。傍らには「熊出没・注意」の看板。

午後4時半に内山大橋に着き、再びバスの客と

「たまには歩こう会」

平成24年新年会



を話し合うこととした。さる1月14日(土)午後4時半から恒例の赤坂月世界ビルの「月の市場」に18名の会員が集まった。



先ず、最年長(経専25回)の池邊和郎さんの発声で新年を祝し乾杯した後、懇親に移り池辺先輩差し入れの大方の本格麦焼酎「知心剣(しらしんけん)」が抜かれ、飲みながら和やかに歓談が行われた。

昨年(東日本大震災や近畿地方の水害など)自然災害の被害が甚大で、加えて原発事故が復旧・復興を阻害して長期の避難生活を余儀なくされている方々が大勢おられる現状である。たまには歩こう会では「今年こそは平穩に！」との願いを込めて、新年会を開催し、会員相互の懇親を深めるとともに、今年の年次計画

新年らしい雰囲気が高まった所で、永野基昭さんからお得意の詩吟、唐の詩人李白の「早発白帝城(つとに白帝城を発す)」が披露された。続いて野田和文さんからは幕末の勤皇派の僧月性による(男子志を立て郷閨を出ず)で有名な詩「將東遊題壁(まさに東遊せんとして壁に題す)」が披露され、いずれ劣らぬ美声に一同酔いしれた。

が一方、なお名残尽きずに、引き続き歓談する方々も見られた。参加者(安藤幸生・洋子・池邊和郎・小倉章吾・小野二六・加志田智久・坂井大和・恭子・永野基昭・野田和文・野村聡・淵光太郎・戸次笛子・松浦靖弘・松永政弘・姫野易之・用正靖彦・梅谷寛雄以上18名

第五回東京四極会ゴルフコンペ



絶好のゴルフ日和に
千葉・市原京急
カントリークラブで開催

カントリークラブで八名が参加して開催された。当日は、秋晴れで、微風・最高のコース状態と、文句のつけようのないベストコンディションの中のプレイとなった。

春の御殿場・富士カン トリークラブでのコンペに加え、東方面の会員の便宜を考え、千葉で開催するようになって五回目

の大会であった。新ペリアでのハンデ キャップ決定による成績で、吉迫利英さん(43回)がネット74.4で見事優勝。

優勝：吉迫利英(43回) ネット74.4
準優勝：二万田道敏(38回) ネット75.0
ベストスコア：ベスグロ93.0
第三位：高橋信行(44回) ネット78.0
第五位：守谷一誠(40回) ネット78.4
ブリービー賞：江藤浩一(38回) ネット83.4
ニアピン賞：二万田道敏、江藤浩一
《参加者》
瀧口和行(31回)、江藤浩一(38回)、二万田道敏(38回)、守谷一誠(40回)、吉迫利英(43回)、姫野易之(44回)、高橋信行(44回)、野村聡(52回)

同・期・会・開催

現在、首都圏には昭和41年度大分大学経済学部出身者は27名在住しているが、毎年1月に近況報告を兼ねて新年会を開くことを恒例としている。

幹事の永野君の挨拶に続き、遠路名古屋より参加した柴田君の音頭で乾杯の後、久しぶりに会う旧友との歓談が続いた。主な話題は、親の介護、(田舎に住む親の面

倒をみるためしばらく田舎に帰っていた人、又、東京より毎月田舎に帰っていた人、最近東京に親を迎え介護に頑張っている人等、老老介護に苦労している人は多数あり)長年お世話になった人生のパートナーへの感謝の意味を込めての国内海外旅行の話、現役引退後の今後の自分自身の時間の過ごし方(各種ボランティア活動、詩吟等の習い事、大学院での勉強等)人さまざまに楽しく第二の人生を過ごしている模様)等であった。

特筆すべきことは、入江、友添、藤島3君の「大分大学ラグビー部90年史」編纂であろう。全国に散らばる数少ないOBを訪問、当時の貴重な話、写真の収集等をしてラグビー部90年史の発行の運びとなったことは喜ばしい限りである。又、東日

本大震災の後、友添君夫妻及び藤澤君は、現地に飛び汚泥、ガレキ処理のボランティア活動に従事された話等聞き面君に敬意を表する次第である。

最後は、恒例により皆で肩を組み、「鴻図寮寮歌」を合唱、来年も無事に元氣な姿で再会することを誓いあった。(野田記)

参加者(敬称略) 稲積靖彦、入江哲彦、衛藤寛、大竹一郎、葛城征志、釘宮孝、近藤彰、笹原誠二、柴田雅道、友添協一、永野基昭、野田和文、橋津正昭、藤澤恒生、藤島爽、松浦靖弘、山本包介

謹んでお悔やみ
申し上げます
(敬称略)

重光 英俊 (25回)
平成22年9月21日

木本 和孝 (52回)
平成23年4月4日

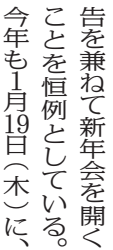
曾我 福司 (29回)
平成23年5月

瀬戸 憲一 (26回)
平成23年6月17日

足立 昭夫 (25回)
平成23年7月11日

武者 昭典 (26回)
平成23年8月15日

平山 正 (19回)
平成23年9月14日



平山 正 (19回)
平成23年9月14日